

# 鴻仰宗の盛衰(六)

石井修道

注の番号

## 目次

一  
はじめに  
二  
仰山慧寂

三  
仰山西塔光穆  
四  
晋州霍山景通

五  
杭州文喜

六  
五冠山順之

七  
仰山南塔光涌

八  
仰山東塔和尚

九  
洪州觀音常鑑

十  
福州東禪慧茂

十一  
福州明月山道崇

十二  
廵州遂昌

十三  
忠州月巖山月光寺大通

(以上第一八・一九号)

(以上第二十号)

- |        |                |            |           |          |          |     |             |              |  |                    |              |            |           |           |
|--------|----------------|------------|-----------|----------|----------|-----|-------------|--------------|--|--------------------|--------------|------------|-----------|-----------|
| (14)   | (13)           | (12)       | (11)      | (10)     | (9)      | (8) | (7)         | (6)          | (5)                                      | (4)                | (3)          | (2)        | (1)       | (十四)      |
| 何が無表戒か | 対境にとらわれない出会いとは | 音の出る前の言葉とは | 直截根源仏所印とは | 古人の跡を指す頌 | 樂普との為人問答 | 励覚吟 | 宗教を諦め物を接する頌 | 香嚴下の僧と洞山との問答 | 香嚴の大悟を仰山に驗 <small>ため</small> される—仰山の評(一) | 口に樹枝をくわえて西來意を問われれば | 団扇をくるくるまわすとは | 香嚴智閑の因縁(一) | 梁鄧州香嚴山智閑伝 | 鄧州香嚴寺智閑   |
|        |                |            |           |          |          |     |             |              |  |                    |              |            |           | (1)~(4)   |
|        |                |            |           |          |          |     |             |              |  |                    |              |            |           | (5)       |
|        |                |            |           |          |          |     |             |              |  |                    |              |            |           | (6)~(7)   |
|        |                |            |           |          |          |     |             |              |  |                    |              |            |           | (8)       |
|        |                |            |           |          |          |     |             |              |  |                    |              |            |           | (9)       |
|        |                |            |           |          |          |     |             |              |  |                    |              |            |           | (10)      |
|        |                |            |           |          |          |     |             |              |  |                    |              |            |           | (11)      |
|        |                |            |           |          |          |     |             |              |  |                    |              |            |           | (12)      |
|        |                |            |           |          |          |     |             |              |  |                    |              |            |           | (13)      |
|        |                |            |           |          |          |     |             |              |  |                    |              |            |           | (14)      |
|        |                |            |           |          |          |     |             |              |  |                    |              |            |           | (15)~(16) |
|        |                |            |           |          |          |     |             |              |  |                    |              |            |           | (17)~(18) |
|        |                |            |           |          |          |     |             |              |  |                    |              |            |           | (19)      |
|        |                |            |           |          |          |     |             |              |  |                    |              |            |           | (20)      |

(15)	最後の頌	董兵馬使の与に説示する偈
(16)	常在の頌	志を専らにする頌
(17)	修行の頌	学人の宗教と宗如に与える頌
(18)	鄭郎中に答える頌(一)	三句の後の意の頌
(19)	鄭郎中に答える頌(二)一機を発す頌	謚号・塔号
(20)	清思の頌	香巖の疎山匡仁への讃
(21)	玄を談る頌	香巖の頌へ七六首
(22)	学人玄機に与える頌	香巖智閑の大悟の因縁(二)
(23)	渾淵の語の頌	道は悟によりて達す
(24)	猶預して虚しく光陰を度ること莫かれ	何が香巖の境か
(25)	古を明かす頌	何が仙陀婆か
(26)	崔大夫に与える玄を暢べる頌	何が正命食か
(27)	宝明の頌	何が仏法の大意か
(28)	出家の頌	何が西來意か
(29)	法堂に寄せる頌	枯木で龍が吟く(一)
(30)	玄旨の頌	四句百非を離れた言葉
(31)	同住に贈る寂に帰る頌	鴻山下の僧との払子の問答
(32)	学を勧むる頌	偈頌二百余篇の流行
(33)	志を守りて得破する頌	香巖襲燈大師の頌へ一九首
(34)	見聞を辞する頌	香巖はまだ祖師禪を得ていない
(35)	分明の頌	
(36)	古路に遵う頌	
(21)		
(22)		
(23)		
(24)		
(25)		
(26)		
(27)		
(28)		
(29)		
(30)		
(31)		
(32)		
(33)		
(34)		
(35)		
(36)		
(37)		
(38)		
(39)		
(40)		
(41)		
(42)		
(43)		
(44)		
(45)		
(46)		

(37)	董兵馬使の与に説示する偈
(38)	志を専らにする頌
(39)	学人の宗教と宗如に与える頌
(40)	三句の後の意の頌
(41)	謚号・塔号
(42)	香巖の疎山匡仁への讃
(43)	香巖の頌へ七六首
(44)	香巖智閑の大悟の因縁(二)
(45)	道は悟によりて達す
(46)	何が香巖の境か
(47)	何が仙陀婆か
(48)	何が正命食か
(49)	何が仏法の大意か
(50)	何が西來意か
(51)	枯木で龍が吟く(一)
(52)	四句百非を離れた言葉
(53)	鴻山下の僧との払子の問答
(54)	偈頌二百余篇の流行
(55)	香巖襲燈大師の頌へ一九首
(56)	香巖はまだ祖師禪を得ていない
(47)	
(48)	
(49)	
(50)	
(51)	
(52)	
(53)	
(54)	
(55)	
(56)	
(57)	
(58)	
(59)	
(60)	
(61)	
(62)	
(63)	
(64)	
(65)	
(66)	
(67)	
(68)	
(69)	
(70)	
(71)	
(72)	

- (58) 枯木で龍が吟ぐ(一)——石霜・曹山の拈語 (73)~(74)  
 (59) 疎山と鏡清の香巖の語についての問答 (75)  
 (60) 西来意を問われば香巖の言葉を尻に敷け (76)

(以上第二十二号)

### 十五 福州大安

(1) 参学比丘允明書撰「唐福州延寿禪院故延聖大師塔内真

身記」

(2) 唐福州怡山院大安伝

(3) 福州大安の大悟の因縁

(4) 靈祐と鴻山を開創す

(5) 定光仏と呼ばれる

(6) 黄巢の軍が来たらどこに逃げるか

(7) 中陰の問答

### 注

(1) 青州||山東省益都県。

(2) 鴻山大円禪師||靈祐 (七七一~八五三)。二の注 (3) 参照。

(3) 南陽忠国師の遺跡||香巖擊竹の話として、禅宗史上特に有名な話である。しかし、次の(2)の『祖堂集』には「竹」は出てこないし、ここも『祖堂集』と同じで、「竹」が出るのは(44)の『伝燈錄』からである。遺跡地とは、河南省鄧州白崖山党子谷香巖寺のことで、六祖慧能の法嗣の南陽慧忠 (?~七七六) が住し、帰葬された所である。二の注 (17) 参照。近況については、「南陽と私——丹霞寺と香巖寺」(『中国仏蹟見聞記』第十集、一九九〇年八月) を参照されたい。因みに、『谿声山色』の「かくて年月をふるに、大証国師の蹤跡をたづねて、武当山にいりて、国師の庵のあとに、くさをむすびて為庵す」(大久保道舟『全集』一一七頁) とある「武当山」は、真字『正法眼藏』卷上一七則も同じであるが、これは道元禪師の加筆による誤りか、宋代の誤った伝承であろう。後の『祖

俗官に仏の所在を問われる

大用現前して軌則が存しないとは

法身と本来身とは何か

面前の狗子いぬを指していう

鴻山にて一頭の水牯牛を牧う

遷化・謚号

鄭十三娘との問答

この田畠にどんな人を置くや

大安は青蛇だ

見事な法堂だが主人がいない

雪峰から蛇に似た枝木をもらう

西院が拍手して笑った意味は

大随法真の大安との機縁

(20) (19) (18) (17) (16) (15) (14) (13) (12) (11) (10) (9) (8)

堂集』にも「香巖山」とある。

(4) 塔一一の注(11)に記したように、陸希声の碑銘が存在したと伝えるが、現存しない。

(5) 一个……=行粥飯僧は、食事の配膳の役で、長とは希望して生涯それを務めることを願い出た常任の役の意味であろう。

(6) 便ち……=香巖が再び鴻山に戻り、悟りの偈を仰山が驗すことを詳細に記すのは、『祖堂集』のみであり、鴻山門下における仰山の正統性の主張がうかがわれる。

(7) 仰山……=如來禪よりも祖師禪の教えの方が深遠であると主張する説は、以後達摩系の禪を言う。この問題は、柳田聖山著『初期禪宗史書の研究』二二三頁以下参照。後の(56)の『景德傳燈錄』の話と比較参照されたい。

(8) 師、僧に……=香巖の西來意の話として有名。テキスト間の語句の異同は、石井修道『中國禪宗史話』一五頁以下で問題にしたことがあるが、ここは『傳燈錄』卷一一に同様の問答があることを次に紹介する以外には問題にしない。

一日謂衆曰、如人在千尺懸崖、口喰樹枝、脚無所蹋、手無所攀。忽有人問、如何是西來意。若開口答、即喪身失命。若不答、又違他所問。當恁麼時、且作麼生。時有招上座出曰、上樹時即不問、未上樹時如何。師笑而已。(東寺宋版一一八〇頁)

虎頭招上座については不明。最後の香巖の笑いは、己の問題提起それ自身にはまり込んだ自分を虎頭招上座によつて知らされた照れ隠しと解釈する。

(9) 問う……=『傳燈錄』卷一一は語句の異同がある。

問、如何是見在学。師以扇子旋転示曰、見麼。僧無語。

(東寺藏版一一七九頁) — 示して曰く、「見るや」。僧、無語。

現在の学は、日常嘗為の事をさす。

(10) 問う、……=『傳燈錄』卷一一に同様の問答がある。

問、如何是無表戒。師曰、待闍梨作俗即説。

(東寺宋版一一七九頁) 問者に還俗したら無表戒を教えてやろうという香巖の答えは、問者は既に無表戒にとらわれてるので問う立場を認めていない。無

表戒は、元来、外面に現われずに身体内部にはたらく戒。『祖堂集』卷二の黃龍誨機の章に「師問香巖、如何是無表戒。巖云、待闍梨還俗、則為汝説」(III—一三六)とあるから、問者は黃龍誨機であることが判明する。誨機、俗姓は張氏、清河(河北省)の人。巖頭全豁の法嗣の玄泉彥に嗣ぐ。湖北省の鄂州黃龍山に住す。超慧大師の号を賜わる。

(11) 問う、……=『傳燈錄』卷一一に同様の問答がある。

問、如何是声色外相見一句。師曰、如某甲未住香巖時、道在什麼處。僧曰、恁麼時亦不敢道有所在。師曰、如幻人心心所法。

(東寺宋版一一七九頁)

声色外相見の一句は、香巖の悟道の偈を踏まえた句で、日常の感覚作用を離れた相見を質問している。

(12) 問う、……『伝燈錄』卷一に同様の問答がある。

問、如何是声前句。師曰、大德未問時即答。僧曰、即時如何。師曰、即時間也。

声前の一旬とは、言葉になる前の道そのものの言語表現。

(13) 問う、……『伝燈錄』卷一に同様の問答がある。

問、如何是直截根源仏所印。師拋下拄杖、（撒）散手而去。

(東寺宋版一一八〇頁)

直截根源仏所印は、永嘉玄覺の『証道歌』の一句。

(14) 古人の跡……『伝燈錄』になし。この偈は自証自悟すべきことを述べる。香巖が偈頌に秀で、その偈頌が流行していたことは、『禪門諸祖師偈頌』卷一の南嶽齊の「龍牙和尚偈頌并序」に述べる通りである。

禪門所伝偈頌、自二十八祖、止於六祖、已降則亡。厥後諸方老宿、亦多為之。蓋以吟暢玄旨也。非格外之學、莫將以名句擬議矣。洎咸通初、有新豐・白崖二大師、所作多流散於禪林。雖體同於詩、厥旨非詩也。迷者見之而為撫掌乎。近有陸龍牙之門者、編集師偈、乞余序之。龍牙之嗣新豐也。凡託像寄妙、必含大意、猶夫驪頸蚌胎烜耀波底。試捧翫味。但覺神慮澄蕩如遊寥廓、皆不若文字之狀矣。且曰、魯仲尼与溫伯雪子、楊眉瞬目示其道而何妨言語哉。乃為之序云耳。偈頌凡九十五首。

禪門の伝える所の偈頌は、二十八祖より六祖に止まり、已降は則ち亡ぜり。厥の後の諸方の老宿は亦た多く之れを為す。蓋して玄旨を吟暢せるならん。格外の学にあらずんば、將に名句を以て擬議せんとする莫し。咸通の初め(八六〇)に洎び、新豊・白崖の二大師有りて、作る所は多く禪林に流散す。体は詩に同じと雖も、厥の旨は詩にあらざるなり。迷者は之れを見て為に掌を撫つ。近ごろ龍牙の門に陞る者有りて、師偈を編集し、余に乞うて之れに序せしむ。龍牙は之れ新豊に嗣ぐなり。凡そ像を託し妙を寄せて、必ず大意を含むは、猶お夫れ驪頸蚌胎の波底を烜耀するがごとし。試みに捧じて翫味せよ。但し神慮の澄蕩して寥廓に遊ぶが如く覺せば、皆な文字の状に若かず。且つ曰く、魯の仲尼と温伯雪子

(早稲田大学図書館所蔵五山版二二丁右)

|| 続巻一一六一四六一 a b)

と揚眉瞬目して其の道を示して何ぞ言語を妨げんや、と。乃ち之れが為に序すと云うのみ。偈頌は凡そ九十五首なり。

この序に記す新豊すなわち洞山良价（八〇七一八六九）と並び称せられる白崖こそ香嚴智閑に他ならない。注（54）参照。

(15) 師と……||『伝燈錄』になし。最後の文の怪は「とがめる」に訂正する。そいつをとがめてどういうつもりだ、の意。

(16) 楽普||夾山善会の法嗣の楽普元安（八三四一八九九）。俗姓は淡氏、鳳翔（陝西省）麟遊の人。湖南省澧州樂普山に住し、蘇溪に遷る。光化元年十一月示寂。世寿六五。

(17) 励覚吟||底本の「励学吟」を『伝燈錄』卷三〇の「励覚吟」に改む。

(18) 励覚吟||『伝燈錄』卷三〇は次のようになる。

満口語、無処説。明明向人道不決。急著力、勤咬噉。無常到来救不徹。日裏語、暗蹉切。快磨古錐淨挑掲。理尽覚、自護持。此生事、終不説。玄學求他古老吟、禪學須窮心影絕。

五ヶ所の異同がある。

(19) 師、宗教……||『伝燈錄』になし。

(20) 洞山……||『伝燈錄』になし。香嚴の多く用いた説に恒照・常照・本来照の三等の照があつたことが知られる。また、香嚴が洞山良价を作家として高い評価をしたことは注目される。良价（八〇七一八六九）、俗姓は俞氏、浙江省会稽諸暨県の人。雲巖靈巖の法嗣。筠州洞山に住す。咸通一〇年三月八日に示寂す。世寿、六三。拙著『宋代禪宗史の研究』一四七頁以下参照。また注（14）参照。

(21) 最後の頌||『伝燈錄』卷一九に「最後語」あり。

有一語、全規矩。休思惟、不自許。路逢達道人、揚眉省來處。蹠不著、多疑慮。却思看、帶伴侶。一生參學事無成、慙懼抱得旃檀樹。

(東寺宋版一六〇五頁)

(22) 常在の頌||『伝燈錄』になし。前頌と共に不思量の境界を示す。

(23) 修行の頌||『伝燈錄』になし。

(24) 鄭郎中の問頌||『伝燈錄』卷一九に答頌のみあり。

語中埋迹、声前露容。即時妙会、古人同風。響應機宜、無自他宗。呵起駭蟬、奮迅成龍。

(東寺宋版一六〇六頁)

鄭郎中とは、鴻山靈祐の碑銘を撰した鄭愚であろう。鄭愚は広東省番禺の人。咸通二年（八六一）に桂管觀察使となり、召されて礼部侍郎を経て、咸通三年（八六二）に嶺南西道節度使、さらに九年（八六八）に韋宙の没後に嶺南東道節度使となる。尚書左僕射で終

る。二の注（15）参照。

（25）鄭郎中又た……『伝燈錄』卷二九にこれも答頌のみあり、「纏」が同じ意味の「才」となるが他は全同。

（26）清思の頌॥『伝燈錄』になし。香巣は常時坐禪していたことが知られ注目される。

（27）玄を談る頌॥『伝燈錄』卷二九に「譚道」の名で同文の頌があり、特に下の二句は有名。

（28）学人玄機……॥『伝燈錄』卷二九に「与學人玄機」の頌があり、語句は全同。「學人に与う。玄機の頌」と読むのは誤りで、玄機は学人の名。但し、伝記は不明であるが、『祖堂集』卷八の竜牙居遁章（II—一五二）に同名の人�이て、この人と思われる。日常當為のすばやいはたらきを強調する。香巣には同道の語の使用例も多く、同じ境界を歩む人を望んでいる。

（29）渾淵の語の頌॥『伝燈錄』になし。渾淵はものの分かれない状況をいい、六根六境のはたらく以前の達人を述べる。

（30）師、衆……॥『伝燈錄』になし。出家者として。信者の布施を無駄にせず、時間を無駄にせずに、急いで悟りを求める誠めである。

（31）古人道く॥石頭希遷の『參同契』の語。『祖堂集』卷四（I—一五四—一五五）。希遷（七〇〇—七九一）、俗姓は陳氏、広東省端州高要の人。青原行思の法嗣。湖南省南嶺に住す。貞元六年一二月二十五日に示寂す。世寿九一。

（32）百丈云く॥『四家語錄』卷三一三「丁右」三三丁右および『祖堂集』卷一四（IV—六三—六四）の百丈懷海の説法の要旨か。この語は『祖堂集』卷一〇の長慶慧棱章（III—七二）にも引かれる。香巣が石頭と共に師翁の百丈の語を引用している点は注目され、内容も参考者の誠めである点も注意してよからう。懷海（七四九—八一四）、俗姓は王氏、福建省福州長樂県の人。馬祖道一の法嗣。江西省洪州百丈山に住す。元和九年一月一七日に示寂す。世寿六六。拙稿「百丈教団と鴻山教団」（『印仏研』第四一卷第一号、一九九二年一二月）参照。

（33）古を明かす頌॥『伝燈錄』卷二九に「授指」の名に同様の頌がある。

古人骨、多靈異。賢子孫、密安置。此一門、成孝義。人未達、莫差池。須志固、遣狐疑。得安靜、不傾危。向即遠、求即離。取即急、失即遲。無計校、忘覺知。濁流識、今古偽。一刹那、通變異。嵯峨山、石火氣。内裏発、焚巔累。無遮欄、燒海底。法網疎、靈燄細。六月臥、去衣被。蓋不得、無假偽。達道人、唱祖意。我師宗、古來諱。唯此人、善安置。足法財、具慙愧。不虛施、用處諦。有人問、少呵氣。更審來、說米貴。

（東寺宋版一六〇五頁）

（34）崔大太……॥『伝燈錄』卷二九に「暢玄。与崔大夫」の名の同文の頌がある。

（35）動容は古路を揚げ॥香巣の悟道偈の一句。但し（2）の『祖堂集』も（44）の東寺宋版の『伝燈錄』になく、醍醐寺所蔵東禪寺宋版の三句目にある。注（44）参照。

（36）宝明の頌॥『伝燈錄』になし。

(37) 出家の頌||『伝燈錄』になし。『宗鏡錄』卷三四に「香巖和尚偈」(大正藏卷四八一五五〇b)に引用され、「少」一字のみ「少」となる。

(38) 法堂に寄せる頌||『伝燈錄』になし。

(39) 僧瑤||僧繇とも書く。張僧繇は梁代の吳の人で、竜や人物画に巧みであつた人。

(40) 玄旨の頌||『伝燈錄』卷三一九にあり、末尾の「咳咳」を「咍咍」を作る。

(41) 同住に贈る……||『伝燈錄』卷三〇にあり。「芽」を「牙」に、「蟬」を「掌」に作る他は全同。香巖の修行仲間が七十人余りであつたことが判る。

(42) 学を勧むる頌||『伝燈錄』になし。

(43) 志を守りて得破する頌||『伝燈錄』になし。

(44) 見聞を辞する頌||『伝燈錄』になし。

(45) 分明の頌||『伝燈錄』になし。

(46) 古路に遵う頌||『伝燈錄』になし。郎中は注(24)の鄭郎中か。

(47) 董兵馬使……||『伝燈錄』になし。董は原文に「董」となるも、俗姓は「董」であろう。但し、その人名は不明。

(48) 志を専らにする頌||『伝燈錄』になし。

(49) 学人の宗教と宗如に与うる頌||『伝燈錄』になし。宗教と宗如についても不明。

(50) 三句の後の意の頌||『伝燈錄』卷三一九に同じ頌あり。

(51) 実録||現存しない。その弟子として、『伝燈錄』卷一二には、一〇人の機縁と目録に一人の名を記している。

①吉州止觀和尚

②寿州紹宗

③襄州延慶法端。紹真大師と号す。

④益州南禪無染

⑤益州長平山和尚

⑥益州崇福演教

⑦安州大安山清幹

⑧終南山豐德寺和尚

⑨均州武當山仏巖暉

(10) 江州廬山双谿田道者

(11) 益州昭覺寺和尚

(12) 睦州東禪和尚

このうち③は鴻山靈祐の法嗣とすべきである。また、四川省益州において活躍した弟子が多いことに特色があろう。

(52) 疎山和尚・洞山良价の法嗣の匡仁（？—一九一五？）は病僧で、洞山下の傍系に置かれる特異な存在である。ここに香嚴の識もその影響をもつて作られた話である。このことについては、柳田聖山『純禪の時代』（禪文化研究所、一九八四年七月）一九五頁以下を参照されたい。なお、『伝燈錄』卷一一では次のようにある。

僧問、不慕諸聖、不重己靈時如何。師曰、万機休罷、千聖不携。此時疏山在衆作嘔声曰、是何言与。師問、阿誰。衆曰、師叔。師曰、不諾老僧那。疏山出曰、是。師曰、汝莫道得麼。曰、道得。師曰、汝試道看。曰、若教某甲道、須還師資礼始得。師乃下座礼拝、躡前語問之。疏山曰、何不道肯重不得全。師曰、饒汝恁麼、也須三十年倒廄。設住山無柴燒、近水無水喫。分明記取。後住疎山、果如師記。至二十七年病愈。自云、香嚴師兄記我三十年倒廄、今少三年。在每至食畢、以手抉而吐之、以應前記。〈疎山後問道愆長老、肯重不得全、汝作麼生会。愆云、全歸肯重。疎山云、不得全又作麼生。愆云、个中無肯路。疎山云、始愜病僧意。〉（東寺宋版一一七九、一八〇頁）

この問題の後半の割注については、(59) 参照。

(53) 大安和尚・福州大安について、十五を参照。

(54) 香嚴の頌②この金沢文庫本は、納富常天氏によって「香嚴頌」（金沢文庫蔵）として三回に亘って翻刻されている（『金沢文庫研究』通巻八六・八七・八八号、一九六三年一・二・三月）。その後、『金沢文庫資料全書第一巻禪籍篇』（神奈川県立金沢文庫、一九七四年三月）にも収められ、筆者が解題を担当した。この香嚴頌は、七六首あるが、⑥と⑦は同一の頌とみるべきであろう。最大の問題は、これらが果たして香嚴智閑の頌といえるのか、ということである。少くとも、二つの面で全てを香嚴の頌とするには疑問がある。第一は龍牙居遁の頌と同一の句があることである。金沢文庫本には、別筆で「香嚴頌畢」と書かれた後に、次の一句が加えられている。掃地煎茶及把針、更無余事可留心。山門有路人皆到、我戸無門那畔尋。

この頌が注(14)で紹介した「龍牙和尚偈頌」の九五首の一九句目であることは、筆者の解題で触れておいた。ただ、それ以外の七五首は従来知られていない新出の香嚴頌として紹介し、内容まで検討をしないで今日に至った。ところが、七二句は龍牙の次の四四句に同一といつてよからう。

朝看花開滿樹紅、暮觀花落樹還空。若將華比人間事、花与人間事一同。（前掲書二五丁左）

三句目の「若將花樹比人間」にわずかな相異は認められるものの、同一句である。このことは、香嚴の頌が誤って龍牙の頌と伝えられ

たか、逆に龍牙の頌が香嚴の頌と伝えられたか、であろう。別人の頌が両方に伝えられることは全くない訳ではないが、その可能性は少いといえよう。ただ現在調査したところでは、香嚴の七六首のうちこの一首のみである。

第二は、香嚴の七六首のうち香嚴の行状と一致しない頌があることである。このことを検討するのに、まず『泉州千仏新著諸祖師頌』の慧觀の序を紹介してからにしよう。

### 泉州千仏新著諸祖師頌 終南山僧慧觀撰序

南岳泰公著五讚十頌、當時称之以美談。及樂浦・香嚴、尤長厥頌。斯則助道之端耳。自祖燈相囑、始迦葉終曹溪、凡三十三祖、信衣之後、迨數人先賢之所未讚者、愚且病焉。雖宝林祖述其事閱而可委、奈何忘機。尚懶者或陋其繫遠殘秋之可。愚得以前意、請於千仏燈禪師。罕讓而弗獲免。未信宿而成。蓋辭理生。千仏之筆、當時問答奇句、或糅其間、約字雖則未多、此識者曆觀諸聖之作、於是乎在矣、亦猶納須弥於芥子、其揆一也。是以命牋染翰、為之序云。

南岳泰公は五讚十頌を著わし、當時、之れを称して以て美談とす。樂浦・香嚴に及んで、尤も厥の頌に長ぜり。斯れ則ち道を助くるの端なるのみ。祖燈相い囑してより、迦葉に始まり曹溪に終わるは、凡そ三十三祖にして、信衣の後、数人の先賢に迨ぶところの未だ讚ぜざる者は、愚且く焉を病む。『宝林』の其の事を祖述して閲して委すべしと雖も、機を忘るは奈何せん。尚お懶きがごとき者は、或は其の繫遠殘秋の可を陋む。愚、以て前意を得て、千仏燈禪師に請う。讓ること罕にして免るるを獲ず。未だ信宿せずして成る。蓋し辭理の生ならん。千仏の筆、當時の問答奇句、或は其の間に糅え、字に約して未だ多くならずと雖則も、此の識者の諸聖の作を曆観せば、是に於いて在らんや、亦た猶お須弥を芥子に納るるがごとく、其の揆は一なり。是を以て牋を命じ翰を染めて、之れが為に序すと云う。

柳田聖山「祖堂集の資料価値」(『禪學研究』第四四号、一九五三年一〇月)五五頁。大正藏卷八五一三一〇c~一三二-a 参照。

注(14)を参照すれば、香嚴の時代に偈頌が流行し、中でも南嶽齊己・龍牙居遁・洞山良价・南嶽玄泰・樂浦元安・香嚴智閑の六人が知られていたことが判明する。

今、金沢文庫本の香巣頌七六首のうち<sup>(15)</sup>と<sup>(64)</sup>に「南嶽」と「祝融峰」の語があり、作者が南嶽で活躍したことは明らかである。『南嶽總勝集』を参考にすれば、<sup>(10)</sup>の「蓮花」は「蓮華峯」、<sup>(60)</sup>の「碧峰」は「碧雲峯」か「碧鷺峯」のことであろう。しかも、<sup>(8)</sup><sup>(9)</sup><sup>(20)</sup><sup>(21)</sup><sup>(29)</sup><sup>(35)</sup><sup>(53)</sup><sup>(58)</sup><sup>(74)</sup>においてみられるように、作品は作者の晩年に作られたものと考えてよいであろう。特に<sup>(25)</sup>と<sup>(35)</sup>にある「翠微」および「翠微峰下の寺」は大きな手がかりになるはずである。今、龍牙居遁（八三五—九二三）の略伝を考える。俗姓は郭氏、江西省撫州南城県の人である。一四歳で吉州満田寺で出家し、六年して嵩嶽で具足戒を受けた。まず丹霞天然の法嗣の無学に終南山の翠微寺において参学するのである。その後、『祖堂集』では、香巣智閑・徳山宣鑑・白馬曇照に参じたといい、『伝燈錄』や『禪林僧宝伝』では、臨濟義玄に参じたと伝える。それらの師の下では機縁契わらず、最後に洞山良价に嗣法するのである。楚王馬殷の招きで龍牙山妙濟禪院に住するが、馬殷が楚王となつたのは開平元年（九〇七）四月のことである。時に居遁七三歳の時である。洞山良价に参じたのは、『伝燈錄』に八年間というが、洞山が示寂した咸通一〇年（八六九）は居遁三五歳であるから、龍牙山に招かれる以前に南嶽で山居生活していた可能性を考えてよいであろう。但し、このことを証明する記録はない。馬殷に認められたのは、居遁の山居詩が禪林で評価を受けた為ではあるまいか。龍德三年九月一三日、八九歳で示寂した。

金沢文庫本の香巣頌に混入する龍牙居遁の一首と「南嶽」や「翠微」の記事より、金沢文庫本の頌は龍牙居遁の作である可能性を問題提起してみた。七六首すべてはまさに山居詩である。南嶽関係の詩はあるいは南嶽文泰のもので、他の人の作も混入していると考えられないこともない。特に現存の龍牙居遁の九五首の頌には南嶽との関連を示すものはない。龍牙山が九一句に出るだけである。それ故に居遁の最晩年の作を含むのであろう。とりあえず金沢文庫本の七六首を同一作者とみて、居遁の作の可能性を推測するにとどめる。

(55) 鄱州香巣智閑<sup>(2)</sup>の『祖堂集』の大悟の因縁と類似するが、この話が香巣擊竹の話としてあまりに有名があるので別に取り上げた。しかも(3)のこの悟道偈をめぐる仰山との話も異なる。なお、注(35)でもいうように、醍醐寺所蔵本の東禪寺宋版の悟道の偈は語句が次のように異なる。

一擊亡所知、更不仮修治。動容揚古路、不墮悄然機。处处無蹤跡、声色外威儀。諸方達道者、咸言上上機。

(東寺宋版一一七八頁上段)

(56) 師、上堂…『曹溪大師伝』の「道由心悟。豈在坐耶」（拙稿『曹溪大師伝』考）（『駒沢大学仏教学部紀要』第四四号、一九八八年三月）九六頁、また拙著『禪語錄』（中央公論社、一九九二年一月）一二五頁および注(126) 参照。

(57) 問う…(51) の有名な枯木裏竜吟の語で知られる香巣は、その境界に特別なものを立てることはない。

(58) 問う…(51) の有名な枯木裏竜吟の語で知られる香巣は、その境界に特別なものを立てることはない。

(58) 問う…(51) の有名な枯木裏竜吟の語で知られる香巣は、その境界に特別なものを立てることはない。

神通であるが、仙陀婆も特殊な怜憫さを述べるのではない点で同じである。

(59) 問う…＝正命食は邪な方法によらない食を得る方法で、乞食による出家生活。それを香嚴は具体的に真似てみせたもの。

(60) 問う…＝仏法とは、現実の今年の自然の厳しい攝理で示した。

(61) 問う…＝達磨の教えを聞いた僧に、やすやすと受け取ろうとする僧を突き放したために、僧が全くとまどった話。

(62) 問う…＝香嚴の代表的な問答の一つ。道は竜の形をした枯木がうなるように、髑髏の目玉が光るように、情識や分別を断ち切った上に、そこに枯木の吟きときりと光る目玉をはたらかなければならないことを述べた。(58) を参照。

(63) 問う…＝殺生を業とする者に不殺生を説いても成り立たないように、問者にすでに問う資格がない。

(64) 師…＝鴻山とその弟子の香嚴が共に祖師西来意の問いに、払子を立てて答えている。その意味が理解できなくともムキになることはないのであって、仏法とは不会であることを説いている。

(65) 玄沙＝玄沙師備のこと。香嚴の教えが鴻山のものまねに終つたことを認めなかつた。

(66) 雲居錫＝法眼文益の法嗣の雲居清錫のこと。この人の著語は、ほとんど発問の語のみ。

(67) 偽頌二百余篇＝『新唐書』卷五九に「智閑偽頌」一卷二百余篇(中華書局本一五三二頁)とあり、この説を継承する。なお、智閑の示寂は、乾寧二年(八九五)頃と考えられる。

(68) 香嚴…＝以下に『祖堂集』と重複しない一九首のうちの一〇首を記す。固有名詞の薛判官は不明。

(69) 師…＝仰山が香嚴に如來禪を得ていているが祖師禪を得ていないとする(3)と同じ内容であるが、その語が生まれる背景は(3)の方が詳細である。

(70) 玄覺＝法眼文益の法嗣の玄覺導師報慈行言のことで、この人の著語も発問にのみで終ることが多い。

(71) 長慶稜＝雪峰義存の法嗣の慧稜(八五四一九三二)は二の注(106)参照。この代語は(60)参照。

(72) 師…＝三聖慧然は、宋代になると臨濟義玄の法を継承した人とされる。ここでもその氣概の一端を見せる。

(73) 僧拳す＝(51)の問答の伝承を示す。

(74) 石霜＝道吾円智の法嗣の石霜慶諸(八〇七一八八八)および洞山良价の法嗣の曹山本寂(八四〇一九〇一)の拈語。共に青原系の禅者であり、湖南・江西の禅林で香嚴の禅が話題になつたことが知られる。しかも、石霜・曹山共に香嚴の語を別の表現で肯つたといえよう。

(75) 師…＝(42)の問答を取り上げたもので、既に注(52)の『伝燈錄』卷一の香嚴章に同内容が割注で示されたもの。故に『伝燈錄』は卷一一と卷一七の二ヶ所に出づ。鏡清は雪峰義存の法嗣の鏡清道心のこと。

(76) 問う……(56) の割注によれば、長慶は別の問答において同じ語を述べる。元来、(56) の代語かもしれない。西來意の問答となれば、(4) の問答をさし、その注で述べたように、香巖が自ら提出した難問に、自らが身動きできなくなつたのを、長慶が白紙に戻すことで香巖を救つたといえよう。

## 十五 福州大安

### (1) 參學比丘允明書撰「唐福州延壽禪院故延聖大師塔内真身記」<sup>(1)</sup>

①大師諱大安、則禪門大善知識、演如來最上乘。癸酉年、降生於福州福唐縣陳氏儒學之家也。神器寬厚、不撓不顧、性門浩瀚、難測難窮。少稟黃蘖山智積禪師、屬邑浦城縣有戒壇。

②元和丁酉歲、天預降桂子於上、產芝於旁。祥雲蓋中、鳳凰插側。師其年果詣壇、請靈藹大德而具尸羅。

③便遊上元、中路逢一叟、堅勸往南昌不虛行矣。遂從命、<sup>(是カ)</sup>□夏尋半字。夕聞一禪長老云、百丈知識、一寶自明、繁文徒倦。師頓悟。

大師、諱は大安<sup>(2)</sup>、則ち禪門の大善知識にして如來の最上乘を演ぶ。癸酉（七九三）の年、福州福唐縣の陳氏の儒學の家に降生す。神器寬厚にして撓まず顧らず、性門浩瀚にして測り難く窮め難し。少くして黃蘖山智積禪師に稟け、邑の浦城縣有の戒壇に属す。

元和丁酉（八一七）の歲、天は預め桂子を上より降し、芝を旁に産す。祥雲、中を蓋い、鳳凰、側に插る。師、其の年、果たして壇に詣り、靈藹大德<sup>(5)</sup>を請して尸羅を具す。

便ち上元に遊ばんとするに、中路、一叟に逢い、堅く南昌<sup>(7)</sup>に往かば虚しく行せざると勧めらる。遂に命に従い、是の夏、半字<sup>(8)</sup>を尋ぬ。夕、一りの禪長老<sup>(9)</sup>の云うを聞く、百丈<sup>(10)</sup>は知識にして、一寶自ずから明らかなり、繁文は徒らに倦むと。師、頓に悟る。

便ち撫州石輩山<sup>(12)</sup>に入り、慧藏禪師を礼す。門に至りて弩矢

鴻仰宗の盛衰<sup>(1)</sup>（石井）<sup>(2)</sup>

色。禪師曰、無上菩提、有其人哉。

に遭いて試みらるるも懼るる色無し。禪師曰く、「無上菩提は其の人に有るか」。

⑤却之臨洛県、止招提、示入定三日、方返回上元。耆叟又引予遊五台、繞歷巖房、如定中所見。□浴毒龍湫、一無所畏。次之京国、詢道儔真。

⑥爰至長沙大鴻山、謁大円大師。漸見徒、擁半千。師即高臥深巖。巖多虎狼、固而居之。一日大円曰、亡心大士、豈異我乎。自謂、甘露醍醐、可堪敷潤。從此譚至理、引諸學。

⑦丁卯年<sup>(乙丑カ)</sup>、武宗朝、沙汰僧尼。師則公然巖隱。

爰<sup>(ミニ)</sup>に長沙の大鴻<sup>(16)</sup>山に至り大円大師に謁す。漸らく徒を見るに半千を擁す。師即ち高く深巖に臥す。巖に虎狼多し、固より之に居す。一日、大円曰く、「亡心の大士、豈に我れに異ならんや」。自ら謂えらく、「甘露醍醐は敷潤に堪うべし」。此より至理を譚り諸學を引く。

乙丑<sup>(17)</sup>（八四五）の年、武宗朝、僧尼を沙汰す。師則ち巖隱に公然たり。

未だ二年もせざるに、宣宗は天下の精舍を復す。即ち道州の開元寺に居す。殿の西に魅穴有り、前潭に通ず。師、石を以て之れを閉して禅室と為す。

庚辰<sup>(18)</sup>（八六〇）の年、却た大鴻に入り、諸の來學を接す。

懿宗丙戌歲、春離鴻水、秋到福州。居府西八里怡山禪宮儀豁。嘗有千僧、閩之大乘、以此興盛。師每登座、譚無為曰、有什麼事。快出頭來道却着。先聖出世如電<sup>20</sup>。莫禁却他作用去。快活去。天下稟法之流、得而密契。

せよ。先聖の出世は電弘の如し。他の作用を禁却し去ること  
莫かれ。快かに活しがれ。天下の法を稟くる流は、得て密  
契す。

⑪癸巳年、門人惠真、奏其繼祖之德、蒙勅封、所居為延壽禪  
院、度三十僧。丙申年、又聞天蒙賜紫衣号延聖大師。勅到  
日、桂子又降于戒壇。則知瑞應。

⑫

中和三年癸卯秋、遊黃蘖旧地。纔出山、法堂巨梁告折、警  
象若是。師則不語而廻延壽。冬十月廿二日申時、於方丈中、  
垂足疊掌、坐化于床。日曨愁色、鳥悲柏林。道俗傾城、如喪  
考妣。真身入蓮華龕。甲辰四月卅日、迎于鳳凰山、石藏開  
蓋、以營塔廟。大師不嘗睡地、不浴溫堂。或疾不穀不餌。寿  
終九十一載、法譚四十余年。略紀陰銘、余鐫陽碣、謹記。

癸巳（八七三）の年、門人惠真<sup>(21)</sup>、其の祖を繼ぐの徳を奏し  
て勅封を蒙り、居する所を延壽禪院と為し、三十僧を度す。  
丙申（八七六）の年、又た天に聞し、蒙りて紫衣を賜わり延  
聖大師と号す。勅の到りし日、桂子又た戒壇より降る。則ち  
瑞應なることを知る。

中和三年癸卯（八八三）の秋、黃蘖の旧地に遊ぶ<sup>(23)</sup>。纔かに  
山を出するに、法堂の巨梁、折れるを告げ、象を警めること  
是の若し。師、則ち語らずして延壽に廻る。冬十月廿二日の  
申の時、方丈の中に於て足を垂れ掌を疊ね、床に坐化す。  
日曨く愁色し、鳥悲しみて柏林たり。道俗傾城して、考妣を  
喪うが如し。真身、蓮華龕に入る。甲辰（八八四）、四月卅  
日、鳳凰山に迎え、石藏、蓋を開き、以て塔廟を營む。大  
師、嘗て地に睡せず、温堂に浴せず。或し疾すとも穀せず餌  
せず。寿終、九十一載、法譚、四十余年なり。略して陰銘に  
紀し、余は陽碣に鐫る、謹しんで記す。

## （2）唐福州怡山院大安伝（『宋高僧伝』卷一二）

①积大安、姓陳氏、閩城人也。幼年入道、頓拏塵蒙。

积大安、姓は陳氏、閩城の人なり。幼年にして道に入り、  
頓に塵蒙を拏う。

②元和十二年、勅建州浦城県乾元寺、置兜率壇、始全戒足。時天雨桂子、及地生朱草。刺史元錫手疎其瑞、上達冕旒。遂廻御礼、詔改鳳棲寺、号靈感壇焉。

③安因往洪井、路出上元。忽逢一老子曰、子往南昌必有所得。及咨參律學、夜聞二僧談論。遽了三乘之旨。乃以所習、付之同人。

④之臨川、見石輩山慧藏禪師。藏之提唱、必持弓弩、以擬學人。安服拝未興、唱曰、看箭。安神色不撓、答對不差。石輩乃投弩曰、幾年射始中半人也矣。

⑤安遊五台、入竜池沐浴。雖久寢漣漪、殊無奮暴雨雹之怪。觀者驚悚。

⑥後止鴻山、禮大円禪師。復証前聞而為量果也。

⑦時予章廉使、贈太尉崔貞孝公、則魏公之季父。深契玄機、敦安之道、飛疏召之。厥譽愈昌。咸通十四年、詔宣號延聖大師、賜紫袈裟一副。

⑧中和二年、示疾。所止法堂巨梁折。三年癸卯十月二十二

元和十二年(八一七)、建州浦城県の乾元寺に勅して兜率壇を置き、始めて戒足を全うす。時に天は桂子を雨ふらし、及び地は朱草を生ず。刺史元錫手ら其の瑞を疎して冕旒に上達す。遂に御礼を廻らして、詔して鳳棲寺と改め、靈感壇と号す。

安、洪井に往かんとするに因りて、路、上元<sup>(28)</sup>に出づ。忽ち一老子に逢うに曰く、「子、南昌<sup>(29)</sup>に往かば、必ず得る所有らん」。律學を咨參するに及んで、夜、二僧の談論するを聞く。遽かに三乘の旨を了る。乃ち習う所を以て之れを同人に付す。臨川に之き、石輩山慧藏禪師に見ゆ。藏の提唱は、必ず弓弩を持して以て学人を擬る。安、服拝して未だ興ざるに、唱えて曰く、「箭を看よ」。安は神色撓れず答對差<sup>(30)</sup>わづ。石輩乃ち弩を投じて曰く、「幾年か射て始めて半人に中れり」。

安、五台に遊び、竜池に入りて沐浴す。久しく漣漪に寝ると雖も、殊に奮暴雨雹の怪無し。觀る者驚悚す。

後に鴻山に止まり大円禪師を礼す。復た前聞を証り量果と為す。

時に予章の廉使、贈太尉崔貞孝公<sup>(30)</sup>は、則ち魏公<sup>(31)</sup>の季父なり。深く玄機に契い、安の道を敦うし、疏を飛ばして之れを召す。厥<sup>(32)</sup>の譽は愈いよ昌んなり。咸通十四年(八七三)、詔宣して延聖大師と号し、紫袈裟一副を賜わる。

中和二年(八八二)、疾を示す。止る所の法堂の巨梁、中

日、坐化于怡山丈室。春秋九十一、臘六十七。

⑨統詔贈円智大師、塔号証真。安不嘗睡地、不處溫房、隨化而衣、天雨而浴。諸法弟子慧長、入閔揚安之德、故有追謚也。

⑩博陵司空相國、仰慕前烈、遂著文頌德。詩人周朴、篤重安、時入山致禮焉。

(大正藏五〇・七八〇中下)

### (3) 福州大安の大悟の因縁 (以下『祖堂集』卷一七の福州西院和尚の章)

①福州西院和尚、嗣百丈。師諱大安。福州福唐県人也。未覩行狀、不知姓族。自少於黃蘖寺出家。

福州西院和尚は百丈に嗣ぐ。<sup>(36)</sup> 師諱は大安。福州福唐県の人なり。未だ行狀を覗ず、姓族を知らず。少きより黃蘖寺に於て出家す。

乃ち僧と為るに至りて、本とより聽習せんと擬<sup>(37)</sup>。因に洪州二句玄機、似少省覺。

余れより便ち百丈に造る。既に盛筵なるを覗て、深く志慕

求識仏、如何是仏。百丈云、太似騎牛覓牛。師云、識得後如何。百丈云、如人騎牛至家。師云、未審、始終如何保任、則得相應去。百丈云、譬如牧牛之人、執鞭視之、不令犯人苗稼。師從茲領旨、頓息万縁。

折す。三年癸卯（八八三）、十月二十二日、怡山の丈室に坐化す。春秋九十一、臘六十七。

続いで詔して円智大師<sup>(32)</sup>と贈り、塔を証真と号す。安、嘗て地に睡せず、溫房に處せず。化に隨いて衣、天雨ふつて浴す。諸法の弟子慧長<sup>(33)</sup>、閔に入りて安の徳を揚ぐ。故に追謚有り。

博陵の司空相國<sup>(34)</sup>、前烈を仰慕して、遂に文を著わし徳を頌す。詩人周朴<sup>(35)</sup>、篤く安を重んじ、時に山に入りて礼を致す。

④性好辛勤、少親言論。更不尋經討論、放曠任情。夜則山野頭陀、昼則倍加執役。

(V—二~三)

#### (4) 靈祐と鴻山を開創す

後隨祐禪師同創鴻山。則十數年間、僧衆猶小。師乃頭頭耕耨。處處勞形。日夜忘疲、未嘗輒暇。鴻山見而語曰、安汝少勞役。師云、待和尚觀五百衆、安則休也。不久之間、僧衆果至五百。

(V—三)

#### (5) 定光仏と呼ばれる

師乃勞心頓擺。或坐房廊、凝如株杌。或入靈洞、月十不帰。如痴似狂、三十餘祀。夜在第二第三座間。有同流私観其身、燄爾通光。衆人僉曰、定光仏矣。

(V—三~四)

始終如何が保任せば則ち相應することを得し去る。百丈云く、「譬<sup>たとえ</sup>如<sup>たとえ</sup>ば牧牛の人の鞭を執りて之れを視て人の苗稼を犯さしめざるがごとし」。師、茲より旨を領し、頓に万縁を息む。性、辛勤を好み、言論に親しむこと少し。更に經を尋ね論を討ねず、放曠すること情に任す。夜は則ち山野に頭陀し、昼は則ち倍ます執役を加う。

後に祐禪師に随つて、同<sup>とも</sup>に鴻山を創<sup>はじ</sup>む。則ち十數年間、僧衆猶<sup>すくな</sup>お<sup>お</sup>小さ<sup>き</sup>がごとし。師乃ち頭頭耕耨し、處處形を労す。日夜、疲れを忘れ、未だ嘗て輒<sup>もつぱ</sup>ら暇<sup>やす</sup>まず。鴻山見て語りて曰く、「安、汝、労役を少くせよ」。師云く、「和尚の五百衆に観<sup>あ</sup>うを待ちて、安則ち休せん」。久しからざるの間に、僧衆果して五百に至る。

師<sup>(39)</sup>乃ち心を労するを頓に擺<sup>や</sup>む。或は房廊に坐して、凝<sup>こら</sup>すこと株杌<sup>しゃこつ</sup>の如し。或は靈洞に入りて、月の十帰らず。痴の如く狂に似たること、三十餘祀なり。夜は第二第三の座の間に在り。同流有りて私<sup>ひそか</sup>に其の身を観るに、燄爾として光を通す。衆人僉な曰く、「定光仏ならん」と。

(6) 黄巣の軍が来たらどに逃げるか

問、黄巣軍來、和尚向什摩処廻避。師云、五蘊山中。僧云、忽被捉着時作摩生。師云、惱亂將軍、惱亂將軍。

(V—四)

(7) 中陰の問答

問、此陰已謝、彼陰未生時、其中事如何。師曰、此陰未謝時、阿那个是大德。對云、不會。師云、此陰未謝尚不会、問与摩時事、作什摩。

(V—四)

(8) 俗官に仏の所在を問われる

①有俗官問、仏在什摩處。師云、不離心地。  
②又問、双峯上人、有何所得。師云、法無所得。設有所得、得於本得。

(V—四)

俗官有りて問う、「仏、什摩の処にか在る」。師云く、「心地を離れず」。

又た問う、「双峰上の人、何の得る所か有る」。師云く、「法に得る所無し。設え得る所有るも、本とより得るを得たるのみ」。

(9) 大用現前して軌則が存しないとは

問、大用現前、不存軌則時如何。師云、用得使用。其僧裸

問う、「<sup>(40)</sup>黄巣の軍來らば、和尚、什摩の処にか廻避せん」。師云く、「五蘊の山の中」。僧云く、「<sup>(41)</sup>忽し捉着せらるる時は作摩生」。師云く、「將軍を惱亂す。將軍を惱亂す」。

形、遶師三匝。師云、向上何不道取。僧纔擬開口。師打之云、這野狐情。<sup>(精)</sup>羅漢和尚拈問僧、當此之時、作摩生免得被他喝出。僧對云、便抽身出去。羅漢云、落脊棒又作摩生。僧却廻頭、今日頼遇某甲。羅漢云、識得闍梨骨也。

(V—四五)

## (10) 法身と本来身とは何か

問、一切施為、尽是法身用。如何是法身。師云、一切施為、尽是法身用。問、離却五蘊、如何是本来身。師云、地水火風、受想行識、這個是五蘊。

(V—五)

問う、「一切の施為<sup>(44)</sup>は、尽く是れ法身の用なり、と。如何なるか是れ法身」。師云く、「一切の施為は、尽く是れ法身の用なり」。問う、「五蘊を離却して如何なるか是れ本来身」。師云く、「地水火風、受想行識。這個は是れ五蘊なり」。

(11) 面前の<sup>いの</sup>子を指していう

有僧到大鴻。師指面前<sup>(到カ)</sup>狗子云、明明个、明明个。僧便問師、既是明明个、為什麼刺頭在裏許。師云、有什摩罪過。有人拳似雪峯。雪峯云、鴻山是古仏也。

(V—五)

僧有りて大鴻に到る。師、面前の<sup>いの</sup>子を指して云く、「明明个、明明个」。僧便ち師に問う、「既<sup>(ナ)</sup>てに明明个ならば、什摩<sup>(ニヤエ)</sup>に到頭に裏許に在るや」。師云く、「什摩の罪過か、有らん」。人有りて雪峰に拳似す。雪峰云く、「鴻山は是れ古仏なり」。

「用かし得れば、便ち用かせよ」。其の僧裸形にて師を遶ること三匝す。師云く、「向上を何ぞ道取せざる」。僧纔かに口を開かんと擬。師之れを打ちて云く、「這の野狐精」。羅漢和尚拈じて僧に問う、「此の時に当りて、作摩生か他に喝出せらるを免れ得るや」。僧對えて云く、「便ち身を抜き出でて去る」。羅漢云く、「脊<sup>(セナガ)</sup>に落とす棒は又た作摩生」。僧、頭を却廻していう、「今日頼いに某甲に遇えり」。羅漢云く、「闍梨の骨を識得せり」。

(12) 滝山にて一頭の水牯牛を牧う

①師又時上堂云、汝諸人來就安覓什摩。若欲得作仏、汝自是仏。担却一个仏、傍家走廻廻、渴鹿趁陽燄相似。何時得相應去。阿你欲得作仏、汝但無如許多顛倒攀緣、妄想惡観、垢欲不淨、衆生之心、則汝便是初心正観仏。更去何處別討。所以安在滝山、三十年來、喫滝山飯、(岡カ)痾滝山屎、不學滝山禪。只是長看一頭水牯牛。落路入草便牽出、侵犯人苗稼則鞭打。調來伏去、可憐生、受人言語。如今一時變作個露地白牛、常在面前、終日露廻廻地、趁亦不肯去。汝道什摩語話。汝諸人各自、身中有無價大寶。從眼門放光、照山河大地、耳門放光、領覽一切善惡音響、六門昼夜常放光明、亦名放光三昧。汝自有、何不識取、影在四大身中、內外扶持、不教傾側、兩脚若子大、擔得二碩、從獨木橋上過、亦不教伊倒地。且是什摩物。汝若覓毫髮、則不可見。故志公云、內外追尋覓惣無、境上施為渾大有。

師又(46)時に上堂して云く、「汝ら諸人、來たりて安に就いて什摩をか覓むるや。若し仏に作らんと欲得すれば、汝自是り仏なり。一个の仏を担却して、傍家に走ること廻廻として渴鹿の陽燄を趁うに相い似たり。何の時か相應を得し去らん。阿你、仏に作らんと欲得せば、汝但だ如許多の顛倒攀緣、妄想惡観、垢欲不淨の衆生の心無くして、則ち汝は便ち是れ初心正観の仏なり。更に何の處に去きて別に討ねん。所以に安は滝山に在りて三十年來た、滝山の飯を喫し、滝山の屎を屙するも、滝山の禪を学ばず。只だ是れ長く一頭の水牯牛を見るのみ。路に落ちて草に入れば便ち牽き出だし、人の苗稼を侵犯すれば則ち鞭打つ。調來伏去するに、可憐生、人の言語を受く。如今、一時に變じて个の露地の白牛と作り、常に面前に在りて、終日露廻廻地に趁えども亦た肯て去らず。汝、什摩の語話をか道わん。汝ら諸人各自に身中に無價の大寶有り。眼門より光を放ちて山河大地を照し、耳門より光を放ちて一切善惡の音響を領覽し、六門より昼夜常に光明を放つ、亦た放光三昧と名づく。汝、自ら有り、何ぞ四大身中に影在りて内外に扶持して傾側せしめず、両脚は若子の大きさにして二碩を担い得て、独木の橋上より過ぐるも亦た伊をして地に倒れざらしめざるを識取せざるや。且も是れ什摩物。汝若

し毫髪も覗むれば則ち見るべからず。故に志公云く、内外に追尋し覗れば惣て無きも、境上に施為すれば渾て大いに有り、と。

(2) 有人拈問石門、古人有言、安在鴻山、三十年來、喫鴻山飯、癟<sup>(46)</sup>鴻山屎、不學鴻山禪。只是長看一頭水牯牛。落路入草便牽出、侵犯人苗稼則鞭打。調來伏去、可憐生、受人言語。如今一時變作露地白牛、常在面前、終日露廻廻地、趁亦不肯去。只如今古人与摩道、意作摩生。石門云、昔日話虎尚乃驚。如今見虎也不怕。僧云、古人分上則与摩。學人分上如何。石門云、取我与食、驢年得味摩。

(V—五—七)

人有りて拈じて石門<sup>(47)</sup>に問う、「古人の言えること有り、安、鴻山に在りて三十年來<sup>(48)</sup>た、鴻山の飯を喫し、鴻山の屎を屙するも鴻山の禪を学ばず。只だ是れ長く一頭の水牯牛を見るのみ。路に落ちて草に入れば便ち牽き出だし、人の苗稼を侵犯すれば則ち鞭打つ。調來伏去するに、可憐生、人の言語を受く。如今、一時に變じて露地の白牛と作り、常に面前に在りて、終日露廻廻地に趁えども亦た肯て去らず、と。只だ如今古人は与摩に道う、意は作摩生」。石門云く、「昔日、虎を話してすら尚お乃ち驚く。如今、虎を見ても也た怕れず」。僧云く、「古人の分上は則ち与摩なり。學人の分上は如何」。石門云く、「我に食を与うるを取らば、驢年なるも味を得んや」。

## (13) 遷化・諡号

師垂化閩城二十載。至中和三年癸卯歲、十月二十一日順化。勅謚円智大師正真之塔。

(V—七)

師、閩城に垂化すること二十<sup>(48)</sup>載なり。中和三年癸卯（八八三）の歲の十月二十一日に至りて順化<sup>(49)</sup>す。勅して円智大師正真の塔と諡す。

## (14) 鄭十三娘との問答（『祖堂集』卷九の羅山道闇の章）

因鄭十三娘年十二、隨一師姑、參見西院大鴻和尚、纏禮拜一、鄭十三娘年十二なるもの一りの師姑に隨いて西院の大鴻和

起、大鴻問、這個師姑什摩処住。對云、南台江辺。鴻山便喝出。又問、背後老婆子什摩処住。十三娘放身、進前三步、又手而立。鴻山再問、這老婆子什摩処住。十三娘云、早个對和尚了也。鴻山云、去去。纔下到法堂外、師姑問十三娘、尋常道、我会禪、口如鈴相似。今日為什摩、大師問着惣無語。十三娘云、苦哉苦哉。具這個眼目、也道我行脚脱取納衣来、与十三娘着不得。十三娘後舉似師、便問、只如十三娘參見大鴻、与摩祇對、還得平穩也無。師云、不得無過。娘云、過在什摩處。師乃叱之。娘云、今日便是錦上更添花。

(III—三三—三四)

(15) この田畠にどんな人を置くや (『祖堂集』卷一九の觀和尚の章)

師問安和尚、只這一片田地、合着什摩人好。安和尚云、好着个無相仏。師云、早是汚却也。

(V—一〇四)

尚に參見するに因りて、纔かに礼拝し起つや、大鴻問う、「這個の師姑は什摩の処に住するや」。對えて云く、「南台江の辺なり」。鴻山便ち喝出す。又た問う、「背後の老婆子は什摩の処に住するや」。十三娘身を放ちて進前すること三歩して叉手して立つ。鴻山再び問う、「這の老婆子は什摩の処に住するや」。十三娘云く、「早個に和尚に對え了れり」。鴻山云く、「去け去け」。纔かに下りて法堂の外に到るや、師姑、十三娘に問う、「尋常道う、我れ禪を會すること口の鈴の如く相似たり、と。今日、什摩為に大師に問着されて惣て語ること無しや」。十三娘云く、「苦なる哉、苦なる哉。這個の眼目を具えるも也た道う、我れ行脚して納衣を脱取し來たりて十三娘に与え着し得ず、と」。十三娘後に師に舉似して便ち問う、「只如ば十三娘の大鴻に參見するがごとき、与摩の祇対は、<sup>は</sup>還た平穩を得るや」。師云く、「過無きを得ず」。娘云く、「過は什摩の処に在りや」。師乃ち之れを叱す。娘云く、「今日便ち是れ錦上に更に花を添えたり」。

師<sup>51</sup>、安和尚に問う、「只だ這の一片の田地、合た什摩人を着くに好きや」。安和尚云く、「个の無相の仏を着くに好し」。師云く、「早<sup>す</sup>是に汚却せり」。

## (16) 大安は青蛇だ

師住庵時、有一僧喫粥了、便辭師。師問、汝去什摩処。僧云、礼拝大鴻。師云、近那。喫飯了去也。其僧便住、喫飯了便辭。師恰得見庵前樹上、有青蛇開口、便指云、汝若去大鴻、只這青蛇是。

(V—一〇四)

## (17) 見事な法堂だが主人がいない (以下『景德伝燈錄』卷九の福州大安の章)

有僧上法堂。顧視東西不見師、乃云好个法堂、只是無人。師從門裏出云、作麼。無對。

(東寺藏宋版一一四〇)

## (18) 雪峰から蛇に似た枝木をもらう

雪峯和尚因入山采得一枝木、其形似蛇。於背上題云、本自天然、不仮雕琢。寄来与師。師云、本色住山人、且無刀斧痕。

(同)

雪峰和尚<sup>(54)</sup>、因みに山に入りて一枝の木を采得するに、其の形、蛇に似たり。背上に於いて題して云く、「本自り天然にして、雕琢を仮らず」。寄せ來たつて師に与う。師云く、「本色の住山の人は、且く刀斧の痕無し」。

師<sup>(52)</sup>、庵に住する時、一僧有りて粥を喫し了りて便ち師を辞す。師問う、「汝、什摩の処に去くや」。僧云く、「大鴻を礼拝せんとす」。師云く、「近し。飯を喫し了りて去け」。其の僧便ち住まりて飯を喫し了りて便ち辞す。師恰<sup>(あたか)</sup>も庵前の樹上を見るを得るに青蛇の口を開かんとする有りて便り指して云く、「汝若し大鴻に去かば、只だ這の青蛇是れなり」。

問、西院拍手笑嘘嘘、意作麼生。師曰、卷上簾子著。

一 問う、「西院の手を、拍つて笑い嘘嘘す、意作麼生」。師曰

## (19) 西院が拍手して笑った意味は (『景德伝燈錄』卷二〇)

(廈州広利容章、東寺藏宋版三九八頁) 一く、「廉子を巻上げ著せよ」。

(20) 大隨法真の大安との機縁(「大隋開山神照禪師行狀」所収)

① 次至嶺外、大鴻和尚会下数載。食不至充、臥不求暖。清苦鍊行、履操不群。大鴻一見、乃深器之。

② 一日大鴻問曰、闍梨在老僧此中、不曾問一転語。師云、教某甲向什麼處下口。鴻云、何不道如何是仏。師便作手勢掩鴻口。鴻嘆曰、子真得其髓。

③ 従此名伝嶺外、声振寰中。

(『古尊宿語要』一八一页、中文出版社、一九七三年三月)

次で嶺外に至り、大鴻和尚の会下に数載す。食は充つるに至らず、臥は暖を求めず。清苦鍊行して、履操群ならず。大鴻一見して、乃ち深く之れを器とす。

一日、大鴻問うて曰く、「闍梨、老僧の此中に在りて曾て一転語を問わづ」。師云く、「某甲をして什麼の処に口を下さしむ」。鴻云く、「何ぞ道わざる、如何なるか是れ仏、と」。師便ち手勢を作して鴻の口を掩う。鴻嘆じて曰く、「子は真に其の髓を得たり」。

此れより名は嶺外に伝わり、声は寰中に振う。

(1) 唐福州延壽禪院故延聖大師塔内真身記||この「真身記」の発見と紹介については、拙稿「鴻山教団の動向について——福州大安の「真身記」の紹介に因んで——」(『印仏研』第四〇卷第一号、一九九一年一二月) および「新出の福州大安の「真身記をめぐって」(『顯庵印幻蔡澤洙博士華甲記念佛教学論集』所収、東国大学校仏教文化研究院発行、一九九一年一月) を参照されたい。『閩中金石志』卷二や『宝刻叢編』卷一九に記載される崔胤撰「大鴻山延聖禪師碑」とは異なるもので、崔胤撰の碑は現存しない。

(2) 大安(七九三—八八三)を「百丈懷海の法嗣と伝えられるが、靈祐の法嗣にふさわしい」と述べておいたが、「真身記」の出現により、百丈懷海の法嗣は誤りで、鴻山靈祐の法嗣であることが確定できた。尾崎正善氏から『宗門統要集』卷五は大安を鴻山靈祐の法嗣とすることを教えていただいた。二の(1)陸希声撰「仰山通智大師塔銘」参照。

(3) 黄蘖山智積禪師||福州福清県永楽郷清遠里にある黄蘖寺で、智積については不明。『三山志』卷三六参照。

(4) 浦城県有の戒壇||建州浦城県の乾元寺と(2)の『宋高僧伝』にあり、兜率の戒壇という。乾元寺は鳳棲寺と改められ、戒壇を靈感壇という。鳳棲寺の名は、靈瑞により、鳳凰が移り棲んだことによつて名づけられたのであらう。

(5) 靈藹大徳<sup>トトロ</sup>拙稿「百丈教団と鴻山教団」(『印仏研』第四一巻第一号、一九九二年一二月)で指摘したように、陳詡撰「唐洪州百丈山故懷海禪師塔銘」に從来不明とされた「初め閩越の靈藹律師、一川の教宗、三学の帰仰なり。嘗て仏性の有無を以て風を嚮い問を發す。大師、書を寓せて以て之れを釈ぐ」の靈藹律師を指すことは明らかである。

(6) 上元<sup>トトロ</sup>江蘇省江寧府上元県。

(7) 南昌<sup>トトロ</sup>江西省の省都の南昌。注(1)の拙稿で述べるよう、当時の洪州宗、つまり馬祖の禅を指したものであろう。上元の中途中で、南昌へ行くことを勧められたとすると、中途とは浦城県から陸路で行った江西省上饒県か、浙江省衢州あたりのことであろう。

(8) 半字<sup>トトロ</sup>半字教とは、小乗教をいい、具体的には、律学のことをさすのである。

(9) 二りの禪長老<sup>トトロ</sup>菩提達磨を開祖とする禪宗に属する人をさすのである。律学を学んだ寺名は不明であるが、その寺には律師や禪師といわれる人々が同居していたのである。

(10) 百丈<sup>トトロ</sup>……百丈懷海を指すが、ここに大安伝の誤解が生まれる背景がある。馬祖道一が示寂したのが、貞元四年(七八八)の二月一日のこと、世寿が八〇であった。その弟子の百丈懷海は、元和九年(八一四)正月一七日に示寂する。「塔銘」によれば、世寿が六六で、『宋高僧伝』卷一〇では、世寿が九五となる。世寿に関しては、宇井説が六六歳であり、一般にその説が採られている。ただ、いずれの資料も示寂年時は、元和九年説で動かせない。大安伝も受戒年時が元和一二年であるが、これも動かせない。当然の結果として、大安が受戒後に百丈懷海に出会うことは不可能なのである。そうなると、百丈とは、百丈懷海の跡を継いだ二世か三世を指すことにならう。百丈の二世・三世については不明であるが、筆者は二世百丈法正、三世百丈涅槃と考えており、二世・三世は百丈教団の組織に重要な役割を果たしている(拙稿「百丈教団と鴻山教団(続)」(『印仏研』第四三巻第一号に発表予定))。あるいは、示寂した懷海を指すとすれば、注(1)の拙稿のように、「洪州馬祖の禪を繼承した百丈懷海は、すぐれた指導者であつて、その説く禪宗こそ釈尊の教えの核心を伝えていることは明々白々である。だからいつまでも小乗教の文字に滯るべきではない」という意味で、百丈とは禪宗の教えを繼承した人と考えられて、代表者と解されたのである。または、(3)の『祖堂集』に「偶たま行脚僧の百丈の一二句の玄機を擧ぐる」とあるように、既に示寂していた百丈懷海の語が取り上げられたのかもしがれない。いずれにしても百丈との直接の出会いを示すものではない。

(11) 頓に悟る<sup>トトロ</sup>小乗を捨てて禪宗を学ぶことを決意したことをここでは指し、その決意するに当つて百丈がかわつたと言えるである。

(12) 撫州<sup>トトロ</sup>……石輩山慧藏は、出家以前は獵師をしていて、馬祖道一に出会ってその門下となり、撫州石輩山で説法す。生没年不詳。

(2) の『宋高僧伝』にも、大安が石輩慧藏に出会ったことは認めているので、大安が禪宗を学ぶにおいて、重要な参考の師となること

とは間違いない。ところが、『祖堂集』や『景德伝燈錄』では大安が石輩慧藏に出会ったことを認めないだけではなく、実際にはあるいは大安と百丈懷海の新たに創作された問答を伝えている。ここに大安伝の大きな問題が生まれる。石輩と大安の出会いの物語は、石輩と三平義忠（七八一—八七二）との出会いとして伝承されていく。この問題は注（1）の論文に詳述したのであるが、大安伝を考えるために必要な問題のみは再論しておくことにしよう。注（1）の論文に検討したように、三平義忠の基本的伝記資料は、王諷撰「漳州三平大師碑銘并序」（『唐文粹』卷六四）であり、別に「漳州三平山廣濟大師行錄」（『嶺南學報』第三卷第一期所収）が伝えられるが、後者の資料は大安の史実を検討するには問題がある。後者の成立事情は、三平の民俗的信仰とかかわり、そのことに関するには、永井政之氏が「三平義忠考——その信仰の成立をめぐって——」（『宗教學論叢』所収）に発表予定とのことであり参照されたい。そこで、まず王諷撰「漳州三平大師碑銘并序」（義忠を義中とする）を紹介することにしよう。

①得菩提一乘、嗣達磨正統、誌其修証、俾人知方。

菩提一乗を得て、達磨の正統を嗣ぎ、其の修証を誌し、人をして方を知らしむ。

②則有大師、法名義中、俗姓楊氏、為高陵人。因父仕閩、生

於福唐縣。年十四、宋州律師玄用剃髮。二十七、具戒。先修三摩鉢提、後修奢摩他、禪那。大師幻悟法印、不汨幻機、日損薰結、玄超冥觀。先依百巖懷暉大師、歷奉西堂百丈石磬。

③後依大顕大師。

④寶曆初、到漳州。州有三平山。因芟雜住持、敝為招提。學人不遠荒服請法者、常有三百余人。示以俗諦、勉其如幻解脫、示以真空、顯非秘密度門。虛往實歸、皆悅義味。知性無量於無量中、以習氣所拘、推為性分、知智無異於無異中、以隨生所繫、推為業智。以此演教、証可知也。大師一日疾背疽、閉戶七日、不通問。洎出、疽已潰矣、無何、門人以母喪

則ち大師有り、法名は義中、俗姓は楊氏、高陵の人為り。父の間に仕うるに因り、福唐縣に生まる。年十四にして、宋州の律師玄用、剃髮す。二十七にして、具戒す。先づ三摩鉢提を修し、後に奢摩他、禪那を修す。大師、幼くして法印を悟り幻機を汨さず、日に薰結を損し、玄に冥觀を超ゆ。先づ百巖懷暉大師に依り、西堂・百丈・石磬を歷奉す。

後に大顕大師に依る。

寶曆の初め（八二五）、漳州に到る。州に三平山有り。芟雜して住持するに因りて、敝いて招提を為す。学人の荒服を遠げずして法を請う者は、常に三百余人有り。示すに俗諦を以てするは、其の如幻の解脱に勉め、示すに真空を以てするは、秘密の度門に非ざるを顯わす。虚しく往きて実もて帰るは、皆な義味を悦ぶ。性の無量を無量の中に知り、習氣の

聞、又閉戸七日、不食飲。

拘わる所を以て、推して性分と為し、智の無異を無異の中に知り、隨生の繋がる所を以て、推して業智と為す。此を以て教を演ぶるは、証して知るべきなり。大師、一日、背疽に疾み、戸を閉ずること七日、通問せず。出づるに泊んで、疽已に潰ゆ。何くも無くして、門人の母の喪聞するを以てす、又た戸を閉すること七日、食飲せざるなり。

⑤武宗皇帝、簡併仏利、冠帶僧徒。大師止於三平深巖

の深巖に止まる。

宣宗皇帝に至り、稍や仏法を復す。巡礼僧有り、常肇、惟建等、二十人なり。刺史、故太子鄭少師薰、其の事を蔵えしむ。旬歳の内、寺宇一新し、旧額に因りて標して開元と曰う。於戯、物の終らざるを知りて、之れを完成し以て教えを裨い、像の尽きざるを知りて、之れを法約し以て微を表わす。其の用を晦まして其の方を知らず、跡を本として其の常を知らざるなり。

⑦咸通十三年十一月六日、宴坐示滅。享年九十二、僧臘六十五。

⑧諷自吏部侍郎、以旁累謫、守漳浦。至止一日訪之、但和容瞪目、久而無言。徵其意、備得行、止事実、相見無間然也。問曰、周易經歷三聖、皆合天旨神道。注之者、以至虛而善忬、則以道為称、以不思而玄覽、則以神為名、達理者也。経云、隱而顯、不言而喻、不疾而速、不行而至。後之通儒、有何疑

諷、吏部侍郎より旁に謫を累ねるを以て、漳浦を守る。至りて一日止まりて之れを訪ぬるも、但だ和容瞪目して、久しき言こと無し。其の意を徵すに、得行を備え事実を止め、相見に間然なること無きなり。問うて曰く、「周易は三聖を経歷して、皆な天旨神道に合す。之れを注する者は、至虚を

也。異日又訪之。適有刑獄、因語及。師曰、孝之至也、無所不善。有其跡、乃匹夫之令節。法之至也、莫得而私。一其政、則國之彝典。其於適道適權又如此。言訖領之、不復更言。今亡矣夫。彊擬諸形容。因為銘曰。

觀跡知証、語默明焉。觀証知教、權實形焉。体用如一、曷以言宣。太素浩然、吾師亦然。觀其定容、見其正性。不閱外塵、朗然內淨。智圓則神、理通則聖。師能得之、隨順無競。吾之行止、師何以知。得性之分、識時之機。達心大師、邈不可追。

以て善く応じ、則ち道を以て称と為し、不思を以て玄く覽て、則ち神を以て名と為し、理に達する者なり。經に云く、隠にして顯われ、不言にして喻え、不疾にして速く、不行にして至る、と。後の通儒、何の疑い有らんや。異日又た之れを訪う。適たま刑獄有り、語及に因る。師曰く、「孝の至るや、不善なる所無し。其の跡有るは、乃ち匹夫の令節なり。法の至るや、私を得ること莫し。其の政を一にするは、則ち國の彝典なり。其の道に適い權に適うに於ても又た此の如きか」。言い訖りて之れに領き、復た更に言わす、今は亡ぜり。彊て諸の形容に擬える。銘を為るに因りて曰く。

跡を觀て証を知り、語默明かなり。証を觀て教を知り、權実形れり。体と用とは一なるが如し。曷ぞ言を以て宣べんや。太素浩然たり、吾が師も亦た然り。其の定容を觀、其の正性を見るに、外塵を聞せず、朗然として内淨なり。智圓なれば則ち神なり、理通すれば則ち聖なり。師能く之れを得て、隨順して競うこと無し。吾の行止は、師何以に知るや。性を得るの分にして、時を識るの機なり。心に達する大師、邈として追うべからず。

潮州大願宝通の法嗣となる三平義忠が、大願に参する以前に石輩慧藏に出会いたことは、この「大師碑」に見られることから認めてよいであろう。その時の機縁は何ら伝えられてはいなかった。ところが、大安と石輩の出会いの機縁は、『祖堂集』卷一四の石輩慧藏章や『景德伝燈錄』卷一四の三平義忠章では、義忠と石輩の出会いの機縁として伝え、むしろ義忠の行状としてのみ禅宗で伝えて行くのである。『祖堂集』卷一四では次のように記している。

三平和尚参師。師架起弓箭、叫云、看箭。三平擗開胸受。師便拋下弓箭云、三十年在者裏、今日射得半个聖人。三平住持後云、登時將謂得便宜、如今看却輸便宜。

## (IV—五二)

これが『景德伝燈錄』卷一四の三平義忠章に次のように記されて定着する。

漳州三平義忠禪師、福州人也。姓楊氏。初參石輩。石輩常張弓架箭、以待學徒。師詣法席次、石輩曰、看箭。師乃披襟当之。石輩曰、三十年張弓架箭、只射得半箇漢。師後參大顛。往漳州、住三平山。

## (東寺藏宋版一一八四頁)

漳州三平義忠禪師は、福州の人なり。姓は楊氏。初め石輩に參す。石輩常に弓を張り箭をかけ、以て學徒を待つ。師、法席に詣でる次、石輩曰く、「箭を看よ」。師乃ち襟を披きて之れを當つ。石輩曰く、「三十年、弓を張り箭をかけるも、只だ半箇の漢を射得たるのみ。師後に大顛に參す。漳州に往きて三平山に住す。

元來、大安と石輩の弓箭問答の機縁が王諷の「大師碑」のようになに存在した。これは『宋高僧伝』卷一二の怡山大安伝でも認めてい。ところが、『祖堂集』や『景德伝燈錄』の大安伝で、大安と石輩の弓箭問答は削除されて、出会う可能性の全くない大安と百丈懷海の新たな話が創作された。創作の過程は、後注(37)で検討する。その創作によつて、弓箭問答は宙に浮き、三平義忠と石輩の問答にすりかえられた、と筆者は推測するのである。くりかえしとなるが、義忠と石輩の出会いを否定するものではない。

(13) 臨洺県＝河北省永平県をさす。

(14) 五台＝文殊の靈場の五台山。中國四大佛教靈場の一つ。『中國仏蹟見聞記第九集』(一九八八年八月) 参照。

(15) 京国＝都のこと。長安をさす。

(16) 大鴻山……大円大師は靈祐(七七一—八五三)で、二の注(3)参照。靈祐と大安が共に大鴻山の創建にかかわったことの確実な記述として注目される。鴻山の開創の様子は(4)参照。

(17) 乙丑＝原本は「丁卯」となる。丁卯は大中元年(八四七)で、武宗は会昌六年(八四六)三月二三日に没しているので、破仏の最も盛んであった会昌五年に改め、次の「未二年」の文とも整合させた。会昌の破仏の期間中の靈祐の行動は、彼の碑銘等で後に検討したい。

三平和尚、師に參す。師、架より弓箭を起こし、叫んで曰く、「箭を看よ」。三平、胸を擗開して受く。師、便ち弓箭を拋下して云く、「三十年、者裏に在るも、今日、半个の聖人を射得たり」。三平住持して後に云く、「登時、便宜を得たりに將謂えるに、如今、便宜に輸けりと看却す」。

(18) 道州の開元寺||道州は湖南省永州府道州をさす。『大明一統志』卷六五の永州府の条に「太平寺。府治の南に在り。唐の開元寺の旧址なり。本朝の洪武（一三六八と一三九八）の初めに建ち、今の名に改む」とある。この地方で活躍した禪者は知られていない。

(19) 庚辰||咸通元年（八六〇）を指す。但だ確かめる資料はないが、大安が鴻山にいた年数を『祖堂集』や『景德伝燈錄』が「三十」と記すので、長期間、鴻山に留っていたと想像される。大安は大中二年（八四八）の戊辰か、遅くとも大中四年（八五〇）の庚午に鴻山に戻ったと推測したい。

(20) 福州……||怡山の開創については、『淳熙三山志』卷三四の候官縣の「西禪寺」の項に次のように記す。  
西禪寺、永欽里。号怡山、一名城山。寺庄其上、古号信首。即王霸所居。隋末廢圮。咸通八年、觀察使李景溫、招長沙鴻山僧大安、來居起廢而新之。十年、改名清禪、尋又改延壽。十四年、賜紫方袍、号延聖大師。命劍南写開元藏經給之。後唐長興中、閩王延鈞、奏名長慶。

西禪寺は永欽里にあり。怡山と号し、一に城山と名づく。寺は其の上を圧し、古く信首と号す。即ち王霸の居する所なり。隋末に廢圮せり。咸通八年（八六七）、觀察使李景溫、長沙の鴻山僧大安を招き、來居して廢を起こして之れを新にする。十年（八六九）、清禪と改名し、尋いで又た延壽と改む。十四年（八七三）、紫方袍を賜わり、延聖大師と号す。劍南に命じて開元の藏經を写さしめて之れに給わしむ。後唐の長興中（九三〇と九三三）、閩の王延鈞、奏して長慶と名づく。  
(以下略)

(21) 惠真||大安の法嗣として燈史の中に從来名を知られていない人である。

(22) 丙申||注(20)の「西禪寺」の項では、咸通十四年（八七三）の癸巳の年とする。

(23) 黄蘖の旧地に遊ぶ||大安の得度の地。

(24) 延寿に廻る||大安が『景德伝燈錄』では「唐中和三年十月二十二日、黄蘖寺に帰りて疾を示して終る。楞伽山に塔す」(東寺藏宋版  
一一四一頁)と黄蘖山で示寂したかのように記しているが、これは誤りで示寂地は延寿寺である。

(25) 鳳凰山||『淳熙三山志』卷三四の候官縣の「雪峰崇聖禪寺」の項に「乾符二年（八七五）、号の真覚及び三衣を賜う。乃ち應天雪峰禪院（主山を鳳凰岡と曰う）と号す」とあり、その後に次のような記事を載せている。

宅里。五年置。初僧大安、中和三年坐<sup>（化カ）</sup>。建塔於鳳凰山、前一宅里。五年（八八五）置く。初め僧大安、中和三年（八八

為亭曰大鴻(祐カ)へ初安与靈□、百丈受具之日、空飄桂子。祐住潭州、休嘗咨之。鄭愚碑其事。僧徒以派同。明年、勅賜大鴻延聖塔寺(<sup>?</sup>旧記大鴻寺成)。熙寧八年、僧洞宏遷此、始更律為禪。一年、余左丞深請為墳院、遂以崇仁顯額。宣和元年、勅改為黃籙院。建炎元年(年)、旧產錢五貫四百六十三文。

一部、文が乱れ、記事の錯綜もあつて読めない所もあるが、鳳凰山に関する記事がみられる。余深が左丞であったのは、政和七年から宣和二年の間である。

- (26) 陽碣ニこの様子は確めずに帰国したので今後に報告されよう。
- (27) 元錫ニ錫、字は君睨。『唐方鎮年表』卷六によれば、元錫が福建觀察使であったのは、元和一〇年から元和一四年までであり、元和一四年から長慶元年（八二二）までは宣歙觀察使であったと伝える。
- (28) 上元ニ注（6）参照。「真身記」では、上元まで行く途中のこととする。
- (29) 南昌ニここでは百丈の名も出て来ない。

- (30) 予章の廉使、贈太尉崔貞孝公ニ崔安潛、字は進之、諡を貞孝といい、太師を贈られる。父は崔從（七六一—八三一）、兄が崔慎由。大中三年（八四九）に進士第に登る。咸通一三年（八七二）から乾符二年（八七五）まで江西觀察使をしていた間に前半に大安を召したのであろうが、その期間は短いものであった。安潛はその後、乾符三年から五年の間には忠武節度使となり、乾符五年から広明元年（八八〇）には劍南西川節度使となつている。檢校侍中、太子太傅などを歴任す。現存しないが仰山慧寂の「通智大師碑」を撰したと『寶刻類編』卷七にあり、鴻山門下との交流があつたことが知られる。『旧唐書』卷一七七、『新唐書』卷一一四に伝がある。

- (31) 魏公ニ崔胤（八五四—九〇四）、字は昌遐または垂休・緇郎という。宰相崔慎由の子。山東省清河武城の人。魏國公に封ぜられる。乾寧二年（八九五）に進士第に登る。中書舍人・御史中丞を経て、景福二年（八九三）戸部侍郎、並同中書門下平章事となる。天復元

三) に坐化す。塔を鳳凰山に建て、前に亭を爲りて大鴻と曰う。初め安と靈祐と与ともに百丈に受具の日、空より桂子を飄らす。祐は潭州に住して、休、嘗て之れに咨う。鄭愚は其の事を碑にす。僧徒派を以て同じくす。明年（八八四）、勅して大鴻延聖塔寺と賜う（<sup>?</sup>旧記に大鴻寺に成る）。熙寧八年（一〇七五）、僧洞宏ニ此に遷して始めて律を更えて禪と爲す。一年（一一八）、余左丞深は墳院と爲すことを請い、遂に崇仁を以て額を顕わす。宣和元年（一一九）、勅して改めて黃籙院と為す。建炎元年（一一七）、旧產錢五貫四百六十三文なり。

年（九〇一）司空となる。天復四年正月九日、宰相を罷め、一二日に朱全忠の手の者に殺された。『閩中金石志』卷一や『宝刻叢編』卷一九によれば、崔胤撰「大鴻山延聖禪師碑」が存在したらしいが、現存しない。『宋高僧伝』の大安伝はその碑に基づいたものであろう。『旧唐書』卷一七七、『新唐書』卷二三に伝がある。崔一族と鴻山下との関係は、次のようになる。

七六一一八三一  
崔 徒  
——  
崔 慎由  
——  
崔 安潛  
〔通智大師碑〕

八五四一九〇四  
崔 胤  
〔魏國公〕  
〔大鴻山延聖禪師碑〕

(32) 円智大師……『祖堂集』や『景德伝燈錄』とは異つて「真身記」はこの謡号を知らない。おそらく崔胤撰「大鴻山延聖禪師碑」が、この謡号を記すのであろう。注(25)の鳳凰山に証真の塔が存在したという意味であろう。(13)の『祖堂集』は「証真」を「正真」とする。

(33) 慧長＝大安の法嗣として燈史の中に從来名を知られていない人である。追謡の下賜の運動をした人という。

(34) 博陵の司空相国＝注(31)にいう崔胤のこと。

(35) 詩人周朴＝周朴、字は太朴または見素といい、泉州の人。『新唐書』卷六〇の「芸文志」に「周朴詩一巻」を載せ、朴は処士と称すとある。また、「周見素詩集」一巻が現存するという。

(36) 百丈に嗣ぐ＝注(2)(10)(12)に述べるように誤伝されたもの。『景德伝燈錄』も大安を百丈の法嗣に誤るが、他の行状は『祖堂集』が「真身記」に近い。

(37) 百丈……＝大安と百丈の出会いが認められないとすれば、当然、創作されたことになるが、創作の素材が(12)の項の大安の説法であることは間違いかろう。『景德伝燈錄』卷九も同様の機縁である。

①福州大安禪師者、本州人也。姓陳氏。幼於黃蘖山受業、聽習律乘。

②嘗自念言、我雖勤苦、而未聞玄極之理。乃孤錫遊方。將往洪井、路出上元、逢一老父、謂師曰、師往南昌、當有所得。

福州大安禪師は、本州の人なり。姓は陳氏。幼きより黃蘖山に於て受業し、律乘を聴習す。

嘗て自ら念言すらく、「我れ勤苦すと雖も、未だ玄極の理を聞かず」。乃ち孤錫遊方す。將に洪井に往かんとして路、上元に出づ。一老父に逢い、師に謂いて曰く、「師、南昌に往かば當に得る所有るべし」。

(3) 師即造于百丈、礼而問曰、学人欲求識仏、何者即是。百丈曰、大似騎牛覓牛。師曰、識後如何。百丈曰、如人騎牛至家。師曰、未審、始終如何保任。百丈曰、如牧牛人、執杖視之、不令犯人苗稼。師自茲領旨、更不馳求。

(東寺藏宋版一一三九、一四〇頁)

百丈の語が『仏垂般涅槃略說教誠經』すなわち『仏遺教經』(大正藏卷二二一一二一a)に基づくことはもちろんであるが、注目すべきことは、大安が実際に師事した石葦慧藏に次のような問答が『祖堂集』卷一四に伝わっていることである。

師後因一日在厨作務次、馬師問、作什摩。対云、牧牛。馬師曰、作摩生牧。対曰、一廻入草去、便把鼻孔拽來。馬師云、子真牧牛。

(IV—五一)

師、後に因みに一日、厨に在りて作務する次、馬師問う、「什摩を作す」。対えて云く、「牛を牧う」。馬師曰く、「作摩生か牧う」。対えて曰く、「一廻、草に入り去らば、便ち鼻孔を把りて拽き來たる」。馬師云く、「なんじ子は真の牧牛なり」。

なお、『景德伝燈錄』卷九の福州大安禪師章については、入矢義高監修『景德伝燈錄』三 卷第七・八・九(禪文化研究所、一九九三年三月)の訓注本が出版された。

(38) 後に……会昌破仏前からの鴻山開創の様子が知られる。大安が靈祐の下で力を合せて鴻山教團を形成するのである。『景德伝燈錄』はその記述は簡単である。

同參祐禪師、創居鴻山也、師躬耕助道。

(東寺藏宋版一一四〇頁)

同參の祐禪師、創めて鴻山に居するや、師躬みずから耕して道を助く。

(39) 師乃ち……大安が定光仏と呼ばれたとする話はここのみである。但し、(14)の上堂と関連があろう。定光仏は然燈仏ともいう。過去仏の一人。

(40) 黃巢……黄巢(？—八八四)は唐末に農民の反乱を指導した人。大安の最晩年の問答で、『景德伝燈錄』に同様の問答を伝える。

この反乱については、松井秀一「唐末の民衆叛乱」(『世界歴史』6所収、岩波書店、一九七一年一月)および堀敏一「黄巢の叛乱」

師即ち百丈に造り、礼して問うて曰く、「学人、仏を識らんと欲求す、何者か即ち是なる」。百丈曰く、「はなは大だ牛に騎りて牛を覗むるに似たり」。師曰く、「識りて後、如何」。百丈曰く、「人の牛に騎りて家に至るが如し」。師曰く、「未審し、始終如何が保任せん」。百丈曰く、「牧牛の人の杖を執り之れを視て人の苗稼を犯さしめざるが如し」。師、茲より旨を領し、更に馳求せず。

唐末変革期の一考察——」(『東洋文化研究所紀要』第一三冊、一九五七年一月) 参照。なお『景德伝燈錄』は「惱亂將軍」のくりかえしがない。

(41) 此の陰……『景德伝燈錄』は、大安の最後の語に相違がある。  
問、此陰已謝、彼陰未生時如何。師云、此陰未謝、那箇是大德。僧云、不会。師云、若会此陰、便明彼陰。

(東寺藏宋版一一四〇頁)

(42) 俗官……①②は内容的には別問答であるが、「又」とあるから同一人の間であろう。『景德伝燈錄』はそのように編集している。  
人問師、仏在何处。師云、不離心。又云、双峯上人有何所得。師云、法無所得。設有所得、得本無得。

(東寺藏宋版一一四〇頁)

双峰上の人とは、注(37)の著の注にいう六祖慧能のことであろう。『祖堂集』卷一六の南泉普願の上堂に「只如<sup>たとえ</sup>ば五祖大師の下に五百九十九人有りて、尽く仏法を会す、唯だ盧行者一人のみ有りて仏法を会せず。他は只だ道を会するのみ。<sup>たゞ</sup>直<sup>ただ</sup>諸仏の出世し來るに至るも、只だ人をして道を会せしめるのみにして、別事を為さず」(IV—一〇七)の「不会仏法」がここ<sup>たゞ</sup>の問答と共通しよう。

(43) 大用現前……『景德伝燈錄』は、羅漢桂琛の拈語を伝えずに、次のように問答のみを伝えている。

問、大用現前不存軌則時如何。師云、汝用得但用。僧乃脱<sup>はたら</sup>脢、遶<sup>もろはだね</sup>師三匝。師云、向上事、何不道取。僧擬開口。師便打云、這野狐精、出去。

(東寺藏宋版一一四〇頁)

問う、「大用現前して、軌則を存せざる時如何」。師云く、「汝用<sup>はたら</sup>かし得れば、但<sup>ただ</sup>用<sup>あつ</sup>かせよ」。僧乃ち脢<sup>もろはだ</sup>を脱<sup>ぬ</sup>ぎ、師を遶<sup>ね</sup>ること三匝す。師云く、「向上の事、何ぞ道取せざる」。僧口を開かんと擬<sup>す</sup>。師便ち打つて云く、「這の野狐精、出で去れ」。

(44) 一切の施為<sup>は</sup>『景德伝燈錄』には、大安が質問する僧と全く異なる立場である意味の問答が最後に加わる。  
問、一切施為是法身用。如何是法身。師云、一切施為是法身。——問う、「一切施為は是れ法身の用なりと。如何なるか是れ

用。僧云、離却五蘊、如何是本來身。師云、地水火風、受想行識。僧云、這箇是五蘊。師云、這箇異五蘊。

(東寺藏宋版一一四〇頁)

「這箇是五蘊に異なれり」。

(45) 僧有りて……『景德伝燈錄』にこの問答なし。到頭とは、つまるところの意。この問答は雪峰義存が大安の狗子の現成を認めたことを賛嘆した。

(46) 師又た……『景德伝燈錄』は、「祐禪師の帰寂に及んで、衆、請うて踵を接がして住持せしむ」とあり、つづいてその鴻山での代表的な上堂として取り上げる。注(37)でも述べたように、鴻山靈祐の法嗣としての大安の代表的説法とすると、百丈懷海の祖師像に与えた影響を考えてよいであろう。

師上堂云、汝諸人揃来就安求覓什麼。若欲作仏、汝自是仏。而却傍家走忽忽、如渴鹿趁陽焰、何時得相応去。阿你欲作仏、但無如許多顛倒攀緣、妄想惡覓、垢欲不淨、衆生之心、則汝便是初心正観仏。更向何處別討。所以安在鴻山、三十來年、喫鴻山飯、屙鴻山屎、不學鴻山禪。只看一頭水牯牛。若落路入草便牽出、若犯人苗稼即鞭撻。調伏既久、可憐生、受人言語。如今變作箇露地白牛、常在面前、終日露迦廻地、趁亦不去也。汝諸人各自有無價大寶。從眼門放光、照山河大地、耳門放光、領覽一切善惡音響、六門昼夜常放光明、亦名放光三昧。汝自不識取、影在四大身中、內外扶持、不教傾側、如人負重擔從獨木橋上過、亦不教失脚。且是什麼物任持、便得如是。汝若覓毫髮即不見。故志公和尚云、內外追尋覓揃無、境上施為渾大有。

師上堂して云く、「汝ら諸人、揃て來たりて安に就いて什麼をか求覓むるや。若し仏に作らんと欲すれば、汝自是り仏なり。而るに却つて傍家に走ること忽忽として、渴鹿の陽焰を趁うが如し。何の時か相応を得し去らん。阿你、仏に作らんと欲せば、但だ如許多の顛倒攀緣、妄想惡覓、垢欲不淨の衆生の心無くして、則ち汝は便ち是れ初心正観の仏なり。更に何の処にか別に討ねん。所以に安は鴻山に在りて三十來年、鴻山の飯を喫し、鴻山の屎を屙するも、鴻山の禪を学ばず。只だ一頭の水牯牛を見るのみ。若し路に落ちて草に入れば便ち牽き出だし、若し人の苗稼を犯さば、即ち鞭撻す。調伏するに既に久しければ、可憐生、人の言語を受く。如今、變じて箇の露地の白牛と作り、常に面前に在つて、終日露迦廻地に趁えども亦た去らざるなり。汝ら諸人、各自に無價の

大宝有り。眼門より光を放ちて山河大地を照らし、耳門より光を放ちて一切善惡の音響を領覽し、六門より昼夜に常に光明を放つ、亦た放光三昧と名づく。汝自ら四大身中に影そみ在て内外に扶持して傾側せしめず、人の重擔を負いて、独木の橋上より過ぐるも亦た失脚せしめざるが如くなるを識取せず。且も是れ什麼物の任持して便ち是の如きを得るや。汝若し毫髮も覓むれば即ち見ず。故に志公和尚云く、内外に追尋して覓れば拋て無きも、境上に施為すれば渾て大いに有り、と。

(東寺藏宋版一一四〇頁)

(47) 石門に……! 石門は福州鼓山神晏(八六三—九三九)を指す。『景德伝燈錄』にはこの拈語はない。この拈語の存在は福州において大安は靈祐の法嗣と確實に考えられていたことを証明する。

(48) 二十載!『景德伝燈錄』は「二十余載」とする。大安が怡山西禪寺に來た年を「真身記」では、咸通七年(八六六)とし、注(20)の『淳熙三山志』では翌年とする。『三山志』にいう招いた李景溫は鴻山の同慶寺の額を上奏した李景讓の弟である。『唐刺史考』卷一五一も『唐方鎮年表』卷六も『三山志』の「西禪寺」の記事による。ただ『三山志』卷一一によると、李景溫が福州刺史になつた年を旧記の咸通四年より咸通八年に改めたのは李景溫の「西禪院記」に依るが、残念ながらその「西禪院記」は現存しない。そのように李景溫の刺史の年代が動くとすれば、「真身記」の説も全く否定できない。ただし「二十載」はいづれにしても概数である。

(49) 順化す!大安の弟子として『祖堂集』と『景德伝燈錄』に知られるのは、次の人である。

① 益州大隨神照大師法真(八七八—九六三)、俗姓は王氏、四川省梓州塙亭県の人。慧義寺で出家す。藥山惟儼・道吾円智・雲巖晏・洞山良价に參じ、最後に大鴻大安に參じて嗣法す。その後、益州大隨山を開く。乾德元年七月一五日示寂す。世寿八六、僧臘六年。(20)の項参照。

② 詔州靈樹知聖大師如敏(?—九一八)、閩川の人。南漢の高祖劉龜に重ぜらる。雲門文偃の參学の師として有名。詔州靈樹院を開く。貞明四年示寂す。

③ 饒州堯山

(4) 福州寿山師解、はじめ洞山良价に参ず。

(5) 泉州莆田県国歛崇福院慧日、俗姓は黃氏、福州候官県の人。名を文矩といい、県の獄卒となる。はじめ烏石靈觀に参ず。ついで万歳塔譚空の下で出家す。閩王に重んぜられ、國歛禪苑を開創す。乾寧中(八九四~八九八)に示寂す。

(6) 台州浮江和尚

(7) 潞州涑水和尚

(8) 広州文殊院円明(八五五~九九〇)、俗姓は陳氏、福州の人。大安に参じた後に雪峰義存にも参ず。五台山の文殊の化現を見て、廣州文殊院を建つ。淳化元年に示寂す。世寿一三六。

(9) 温州靈陽

(10) 洪州紙衣和尚

(50) 鄭十三娘(『宗門統要集』卷六や『宗門聯燈会要』卷一〇)は、大安の法嗣とし、この話を載す。

(51) 師、安和尚(『景德伝燈錄』卷一二の福州烏石山靈觀章)に同様の問答あり。

師一日問西院安和尚、此一片地、堪著什麼物。安云、好著箇無相仏。師云、好片地被兄放不淨。

(東寺藏宋版一二九頁)

師一日、西院安和尚に問う、「此の一片地は什麼物を著くに堪<sup>た</sup>うるや」。安云く、「箇の無相の仏を著くに好し」。師云く、「好き片地、兄に不淨を放たれたり」。

(52) 師、庵に……(前注の同書に同様の話を伝える)。

師因剗草次、問僧、汝何處去。云、西院礼拝安和尚去。時竹上有一青蛇子。師指蛇云、欲識西院老野狐精、只這便是。

(同) ————— 師因みに草を剗<sup>か</sup>る次、僧に問う、「汝何處<sup>いざれ</sup>に去<sup>ゆ</sup>くや」。云く、「西院に安和尚を礼拝し去く」。時に竹上に一の青蛇子有り。師、蛇を指して云く、「西院の老野狐精を識らんと欲せば、只だ這れ便<sup>た</sup>ち是なり」。

(53) 僧有りて……(寺中にいる大安がすぐれた指導者であることを僧が見抜けなかつた話)。

(54) 雪峰和尚(雪峰山崇聖寺は、咸通一年(八七〇)に行実が開創にかかり、乾符二年(八七五)に完成したものである。義存が王審知に庇護を受けてこの地方を代表する禅者であるから、当然大安との交流があつたといえよう。ここは兩人が「皓玉瑕無し、文を彫らば徳を喪う」ことを確認しあつたといえよう)。

(55)

問う……॥西院は大安を指すと思われるが、この話の具体的な内容は不明である。

(56)

次で……॥大安の法嗣の中で『語録』の残る大隨法真の行状に見えるもので、法嗣の大悟の機縁が明確な唯一の問答。

(つづく)

(一九九三・七・一八)